

# 東京未来ビジョン懇談会（第5回）

---

平成29年9月1日（金）

## —議事概要—

## 東京未来ビジョン懇談会（第5回）

平成29年9月1日

【岩瀬次長】 定刻になりましたので、ただいまより第5回「東京未来ビジョン懇談会」を開会いたします。本日の進行役を務めます東京都政策企画局次長の岩瀬でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

初めに、会議の公開についてご説明いたします。

本日の会議の様子は、東京都のホームページ上でインターネット中継により配信されております。

報道機関の皆様は、懇談会の冒頭から終了まで取材が可能です。

また、本日の会議資料、議事概要、中継映像につきましては、ホームページ上に公開して参ります。

それでは、開会に当たりまして、小池知事よりご挨拶をいただきます。知事、よろしくお願いいたします。

【小池知事】 皆様、こんにちは。いつの間にかもう第5回になりました「東京未来ビジョン懇談会」、毎回、皆さんに東京に対する夢を語っていただくということで、回を重ねて参りました。

ちなみに、今日は防災の日であります。私も朝7時半に家を出まして、最悪は歩いてでも、はってでも、都庁に来て、本部長と言って指揮を執らないといけないので、はってでも来ようとは思っているんですが、一応電動アシスト自転車の充電はいつもきちりしております。なんですが、今日は一時、歩きとパトカーに乗って、それからヘリに乗ってというようなことでこの東京都庁にまでたどり着いて、色々な想定の実演というので真剣に、この東京が災害に強いまち、そしてまた都民の皆さんの命と財産をきちりと守るとい、改めてその責任を自覚したところであります。

これをセーフシティと言っているんですけども、そのために、無電柱化とか建物の耐震化、不燃化の推進もしているということでもあります。ですから、安全というのは、これをすれば安全ということだけではなりません。一つ一つ色々なことを確実に進めることによって、そしてまた皆さんの意識も含めて安全が確保されるものだと、このように思っております。

そこで、皆さんには、2040年、2050年も2100年も東京が安全であるように、そのことも念頭に置いていただきながら今日の懇談会を進めていただきたいと思います。

それから、来年が東京150年という年に当たります。江戸から東京府——府だよ、最初。東京府になってから150年という節目になります。そして、皆さんには、だからこそ、その150年の節目の時に、50年後、100年後の東京の未来を描いていただきたいと思います。

さて、今回のプレゼンテーションは、早稲田大学大学院、宿輪理紗さん、そして建築家の田根さんはまたパリからお越しいただきました。メディアアーティストの落合陽一さんは、もう今日のためにしっかりアイデアを詰め込んできていただきました。文明・テクノロジーの観点からのプレゼン、ということになっております。

今日は後半で、ずっとプレゼンを重ねるだけではなくて、ちょっとまとめていかなければなりません、アウトプットということも考えていきたいと思いますので、最後、そのことを話し合いをさせていただくということを前もってお伝えしておきます。

じゃあ、今日も皆さんどうぞよろしく願いいたします。

**【岩瀬次長】** 知事、ありがとうございました。

本日の懇談会では、宿輪様、田根様、落合様にプレゼンテーションをしていただきます。その後、東京の未来や東京の可能性などにつきましてメンバーの皆様全員での意見交換を行い、おおむね18時頃の終了を予定しております。

それでは、ここからの進行は知事にお願いいたします。よろしく願いいたします。

**【小池知事】** ということで、今日は5回目でございます。早速、プレゼンテーションをお願いしたいと思います。宿輪さんは、早稲田の大学院で、i P S細胞——i P S細胞じゃないな。何だっけ。

**【宿輪理紗様】** 私自身は扱ってないです。

**【小池知事】** そうですね。

**【宿輪理紗様】** はい。i P S細胞を使った研究の話も本日させていただきます。

**【小池知事】** そうですか。

**【宿輪理紗様】** はい。

**【小池知事】** はい。それじゃ、早速、宿輪さん、お願いいたします。

**【宿輪理紗様】** 宿輪理紗と申します。どうぞよろしくお願い致します。

さて、皆さんにとって大切な人を思い浮かべていただきたいんです。お子さんやご両親、旦那さんや奥さん、そしてご友人などを思い出していただいても構いません。そのような

方の心臓に大きな問題が生じて、今後もどんな薬を投じても効果がない。「このままだとあと6か月です」と言われたら、皆さんどうしますか。大切な人だから助けたいと思うと思うんですが、一番最初に思い付く治療法、それは心臓移植ではないでしょうか。

現在、心臓移植を行った後、約9割の方は10年以上生き続けることができます。そのため、心臓移植はやはり重症な心臓病の方にとっては一番いい治療法として知られています。しかし、皆さんご存じのとおり、ドナー不足という問題があります。これ、登録日から移植されるまでの平均の待機期間、私も調べてみてびっくりしたんですが、何と3年も待たなきゃいけないんです。これ、3年というだけで長くて驚いたんですが、高齢化がもっともっと進んでいくと、5年、10年と長くなっていくと言われています。

大切な人を救いたい。でも、心臓移植だったら、ちょっともう間に合わないかもしれない。そうなったときに、きっとこの技術、使えると思います。皆さん、こちらの動画をご覧ください。何か中心部が動いていることが分かると思います。これは、人の心臓の筋肉の細胞からつくられた組織です。これは厚さわずか0.1ミリ、髪の毛1本分ほどの厚さなのにもかかわらず、こんなにも力強く動いているんです。私たちの体内で心臓は絶えず動き続けていますが、このような形になっても動き続けるんです。

実はこれ、細胞のシートを3層重ねることによってつくられました。もともと細胞は、増殖させた後、一つ一つばらばらにしか回収できなかったんです。しかし、20年前にこの増殖させた細胞をまとめてぺらっとシート状に回収することができるようになりました。この技術、本当にすごいことで、何がすごいかというと、シートなので、どんどんどんどん重ねていくだけで先ほどのような組織がつくれてしまうんです。先ほどご紹介したのは0.1ミリでしたが、これをもっともっと重ねていくと、「心臓全体も、もしかしたら体外でつくれちゃうんじゃないの」ということが言われています。そして、この心臓、どこか倉庫、保存機関に保存しておけば、重症な心臓病の方が出てきたときに、すぐに待ち時間なく提供することができるようになるんです。

そして、この細胞シートの技術、生み出したのが、私が今研究を行っている研究所です。私は、東京女子医科大学と早稲田大学で連携してつくられたTWInsという施設で日々研究を行っています。ここでは、医学の知識や技術、そして工学の技術や知識、これらを融合させることによって、もっと医療現場での問題解決の役に技術を立たせていこうよということを目的にしてつくられました。このような医工連携施設、実際、全国にもたくさんつくられています。実際、東京都も2年前から医工連携には力を入れているようで、昨

年の11月には日本橋に医工連携イノベーションセンターというものがオープンされました。

このように医工連携施設がつくられることによって、もちろん医学と工学は連携しやすくなったんです。コミュニケーションがとりやすくなったから。しかし、まだ臨床現場での本当の問題解決のために技術が生かされ切れていないと思うんです。じゃあ、この問題解決のために技術が生かされる、これってどういうことかをちょっと図で描いてみたので、ご覧ください。ここに一人の人と緑色の島があります。この人を現状だと考えて、緑色の島を理想だと捉えてください。例えば一番最初の例だと、心臓移植0日、待ち時間なしで移植されるのが一番いいよねというので、それが理想です。でも、現状は3年待たなきゃいけない。理想と比べるからこそ、現状の問題点が見えてくるんですね。

今、人は理想の島に行きたい。でも、行けない。それは何でかと言うと、渡る手段がないから。ここにこういう橋があったらどうでしょうか。人はてくてくと理想の島へ足を運べます。つまり、技術があれば問題が解決できるんです。

これを踏まえて、医工連携の場合、見てみたいと思います。これ、先ほどの図とちょっと似ているんですが、1つ違う点があります。それは、お医者さんの考える理想と技術者の考える理想があること。そうすると、こちらは医工連携施設をつくる前、描いてあるんですが、技術は技術者の考える理想の方に応用されてしまったんです。そうすると、結局、お医者さんが使えない、患者さんのためにならないような技術も生まれてしまったんですね。

この例を挙げるとすると、人工赤血球。赤血球は、体内で肺から酸素をもらって、その受け取った酸素を全身の細胞に届ける、そんな役割をしているんですが、それを聞いた技術者は、じゃあ、カプセルか何かの中に酸素を詰めて、それを放出できるようにすればいいんじゃないか、そう考えてつくって見たんです。しかし、実際に血管の中に入れてみたら、血管が収縮してしまう、血圧が上がってしまう。そうすると患者さんの命は救うことはできませんでした。これ、四、五十年前から研究が始められているんですが、いまだに臨床応用には至っていません。

医工連携施設がつくられた後は、こういう問題は少なくなりました。と言うのも、お互いコミュニケーションがとりやすくなったので、お互いの理想が近づいたからです。

しかし、まだ足りないと思うんですよね。私の理想はこれだと思うんです。お医者さんの考える理想と技術者の考える理想が共有されること。そして、お医者さんの考える理想の方に技術がきちんと橋渡しをしてくれることが大事だと思うんです。このために必要な

こと、先ほど理想の共有と言いましたが、そのために何が必要か考えてみました。私は、相手の価値観を理解する必要があるんじゃないかなと思ったんです。そして、価値観を理解するためには、そもそも自分と違う価値観の人と触れ合ったことがないと、理解するも何もないと。

で、自分の子供時代、思い返してみました。すると、小学校、中学校、そんなに自分とすごい違う価値観の人と触れ合ったとき、なかったんじゃないかなと思ったんです。そして、こちら、公立をイメージして描いたんですが、9年間義務教育で定められていて、小学校、中学校、あると思います。しかし、小学校も中学校も通う所は学区によって定められていますよね。そうすると、中学校に入学しても、小学校と同じようなメンバー、同じような価値観を持つ子とばかり仲良くなっちゃうと思うんです。私は、小学校である程度の価値観が形成された後は、中学校で様々な価値観に触れることが大事なんじゃないかなと思いました。

そこで、東京都に提案したいのがこちらです。中学での生活体験プログラム。これは、様々な価値観を持つ人の生活の体験をすることが概要となっていますが、目的としては、様々な価値観の人に触れることで、相手の価値観を理解できるような大人を育てようということです。対象は、これは都への提案ですので、都内の公立中学生全員としています。この青枠内に書かれている3つの状況、それは、私がイメージして都内の公立中学生の状況を書いたものです。日本で暮らしていて、都内で暮らしている、そして中学生だというのが共通の状況だと思うんですが、これとは違うような状況、例えば海外で生活してみる、地方で生活してみる、社会人体験してみる、そんなのもプログラムの内容として入れていいと思います。

でも、私は、この中で特に地方での生活をちょっと推してみたいと思うんです。大学や高校で今、留学、留学と盛んに言われていますが、私、日本国内でも結構価値観の違って感じたりするんですよ。わざわざ海外に行かなくても感じられるんじゃないか。都内の中学生が地方の中学に通ってみる、また、地方の中学生が都内の中学に通ってみる、それだけでも結構色々なことが刺激として受けられると思うんです。

例えば、私は都内生まれ、都内育ちなんですけど、母方の実家が福島県の会津若松です。この間のお盆に会津若松に行った時に、すごくびっくりしたことがありました。それはケーキ屋さんのバイトなんですけど、何と時給が750円でした。東京都だと900円以上は当たり前、1,000円、1,100円を求めてしまうところ、750円が時給だったんです。もちろん、地域

によってそのように最低賃金が違うということは、情報としては知っていました。しかし、そのように目にすると、印象に残っている程度が全く違うんです。地方に行くことによってそういう経験をたくさん積んでもらって、様々な価値観に触れてもらう。それによって相手の価値観を理解できるような大人を育てて、最終的に医学と工学だけじゃなくて、様々な分野が結びついて、技術が人の役に立てばいいなというふうに考えています。

さて、私は、心臓の話から入って、医工連携の話、そして教育の話までしてしまいましたが、私が最も言いたかったこと、それは技術を人のためにもっと役立たせたいということです。まだまだ私たちの知らないところに潜んでいる技術、素晴らしい技術、たくさんあると思うんです。このような技術、使わないともったいない。このような技術を問題解決のツールとして、私たちが何か問題に感じていることを解決させるツールとして技術を使って、50年後、100年後の私たちの生活が、より豊かで、楽しく、充実したものになるように祈っています。

以上です。ありがとうございました。

**【小池知事】** ありがとうございました。早稲田の理工の先生と、それから東京女子医大の医学の先生とが、まさしく学問の垣根を越えて、クロス何と言うんですかね。

**【宿輪理紗様】** フィールド？

**【小池知事】** うん、クロスフィールドと言うか、あれは、スタンフォードにある学際を超えた学科があるんだよね。そういう形で……。

**【パクン（パトリック・ハーラン）様】** インターディシプリナリー。

**【小池知事】** インターディシプリナリーじゃなくて、とにかく日本はどちらかと言うと縦割りみたいになるんですけど、そこを医学と工学と連携してという話、いただきました。

さあ、それでは、そのままプレゼンを続けていきましょう。次は、建築家の田根さんにお願いをいたしましょう。いつ日本に戻られたんでしょうか。

**【田根剛様】** 昨日です。

**【小池知事】** 昨日ですか、そうですか。田根さんは、ベースがパリでございます。建築家としての作品の一つとして、エストニアというバルト海に面した国がございますが、その国立博物館をアートされました。などなど、とても独創的で、かつ未来的というところで、田根さんの東京の未来、ということでお話をいただきます。よろしくお願ひします。

【田根剛様】 よろしくお願ひします。建築家の田根剛と申します。

今、ふだんはパリを拠点に活動していますが、今回のプレゼンテーションでは、「成長から発想の時代へ」、こういったテーマで東京の未来を考えました。

これは、東京です。首都圏までを含めると人口約3,000万人、世界でも最も人口の多い都市・東京です。でも、一方で、武蔵国の時代までさかのぼっていくと、この土地は湿地帯でした。それが江戸を経て東京となり、300年の間に大きな震災や災害、戦災を経験しながら、戦後の70年の間で東京はこれだけの大きなまちになった。そういった人類史上でも類を見ない驚くべき都市のエネルギーが東京にはあるんじゃないかと思っています。

これが、先の未来に向かってオリンピックを控えながら、この先どのような未来があるか、そういったことを今回の場で自由に発言できるということで、準備してきました。

そこで考えたのが、「成長から発想へ」と考え方をえていこうということです。

1つは、日本は、戦後以降の都市計画においては、都市開発や都市整備ということで成長を繰り返してきました。そのためには、建物をつくっては壊し、つくっては壊し、最近では家の住宅の平均寿命が27年程度、オフィスやマンションなどで40年、公共施設や文化施設でも50年程度で壊されてしまいます。人間の社会や安全や営みを守る建物が人の寿命よりも短いと。特に、自分は建築を専門にしている中でも嫌いな言葉の一つ、上物という扱いを受けながら、建物が減価償却の対象として、時間がたつと価値がなくなっていくと。そこで、更地になった土地だけが計算しやすい仕組みとなっています。一方、ヨーロッパでは、都市計画は歴史の上に成り立っていると。建物は都市の財産として扱われ、文化的にも経済的にも長期的な価値が置かれています。土地は、市や国によって管理されることによって、例えば絵画で言うと、ヨーロッパは、油絵のような上塗りによる財産を、足し算や掛け算による付加価値で使う。日本は、水墨画のように白紙に戻して資産化していくという引き算や割り算のような仕組みになっています。

これは、一つの近代化の図です。開発とか整備を続けた日本は、右肩上がり成長してきました。これは、日本の近代化ということで、もともと100年前までは5,000万人しかいなかった人口が、100年の間に約1億3,000万人まで膨れ上がりました。東京も同じように、もともとは200万人しかいなかった人口が、1,300万人まで膨れてきました。こうした多くの人々を支えていくために、開発や整備を繰り返し、成長曲線をしてきた。明るい未来に向かって成長することが新しい日本の近代化でした。

でも、成長はいつか止まります。自分は、その中で4つのシナリオがあるのではないかと

ということを考えていました。1つは、上を見てさらなる成長を目指す未来。または、成長から成熟へ社会シフトした未来。一方で、人口は減り、減少していく、衰退へ向かう未来。または、その全ての対応が後手に回り、負のスパイラルによって崩壊するかもしれない未来。今から成長の未来があるかと言うと、そこにあんまりリアリティが持たず、一方で成熟へ切りかえられるかと言うと、政治、経済、教育、文化、これが一気に変われるかと言うと、少し怪しいと。そして、現実を見てみると、衰退の道しかないように見え、もしかしたら崩壊するというのも避けたいと。そんなことを悶々と考えながら思っていました。

そこで、ある時思い付いたのが、未来のためにこんなことができないかと。そうした4つの悶々とした未来ではなく、新しい発想が新しい未来をつくる、または発想がなければ未来がないと、こういう状況が今ではないかと思っています。

それを、東京をジャングルのように例えてみました。都市開発や整備などによる管理社会から、地域や環境に対するアイデア、そうした未来の環境をつくるアイデアによって、東京がこれからの時代をつくれないうことなのです。それを、「東京地域環境計画」と名付けました。

ご存じのように、東京は23区26市5町8村の自治体でつくられています。東側はグレーで、西側がグリーンな東京です。

それを、もし東京が「島」だったらと、分解しました。東京には62個の島があり、62個の環境があると。その島それぞれの地域に環境のアイデアを持ち、地域特有の環境をつくっていくという計画です。地域が環境に対して特例や特権を持ち、地域でアイデアを考え、地域が未来をつくる。それが地域環境計画です。

そして、その島の未来は、それぞれの特色を持って出来上がっていきます。島の特色が新しい環境をつくり、その新しい環境がその島の情報となります。現代は情報と環境の時代です。そう捉えたときに、環境がその土地の環境をつくり、情報がその土地の環境をつくっていきます。

その環境・地域をもう少しミクロな世界で観察していきます。都市を構造や骨格などのインフラで捉えずに、お医者さんが患者さんを診るように、診察するように、地域環境の健康状態を診察していきます。

そうした地域環境カルテというものを作成し、例えば渋谷区では、これは駅前の中心地なんですけど、ここは商業地域のようにも見えながらも、実は61.7%が居住地です。でも、

一方で、土地の値段はちょっと小さくて見えないんですけども、土地の値段が1坪7,000万。例えば10坪の土地を買うだけで7億円と。そうしたときに、これではいい建物をつくるお金は残っていません。一方で、地域は情報の宝庫となっています。渋谷では、2020年に向けて駅前を中心にした開発が活発であったり、または代々木体育館が2020年に向けて世界遺産に入ろうと。そうした地域の歴史や新しい情報がこの中に詰まっています。

西東京市、2001年に突然、田無市と保谷市が合併して出来上がりました。もう既に保谷の名前を忘れてしまいそうなほど、土地の名前が変わると場所の意味も薄らいでいく、それが土地と名前との関係です。もともと田畑が多かった地域なので、土被率という土が多く残る地域、または東西を通るロードサイドや電車がまちを分断していると、こういった環境があります。

また、環境はぐっと変わって、檜原村です。戦後のピーク時にいた人口が約3分の1に減少し、また、ご覧のように囲まれた山林地域でも、実はこの森は60%が人工林で出来上がっています。針葉樹が70%、広葉樹が30%。ただ、土地の値段は坪360円。先ほどの渋谷と考えると20万分の1の値段で買えます。

こうした地域のカルテを基に、それぞれのアイデアを考えました。そうした大きな社会問題に悩む森も、地域の具体的な問題、そうした未来のアイデアを思い切って提案しました。

例えば銀座。銀座を、こうした歴史的なレトロモダンというコンセプトに、もともとリジェントストリートをベースにした銀座のまちを、ビジュアル・ポリューションとなるような看板や電柱、電線をなくし、にぎわいを取り戻すために、365日、午前10時から午後6時までを歩行者天国として開放するようなまちにできたら。

また、西新宿は、高層ビルが建ち並びながらも、夜間は人けのない空洞化が続いています。そこで、西新宿で特例を出すことによって、空地だった容積率が緩和され、高層マンションが建ち並びます。そうすると、毎日数時間かけて通っていた多くのサラリーマンが、家族が新宿に住み、新宿で暮らすことのできる職住一体のまちに変わります。

渋谷です。渋谷は、ワシントンハイツから始まったストリート文化が育まれた未来のまちです。最近では、開発によって普通のビルばかりが建ち並んでいますが、渋谷のストリート文化を特徴づけるような建物デザイン、さらに、地域の空中権や地中権を積極的に活用し、一步先を行く東京の未来のまち、そうした渋谷をつくれたらと思います。

また、六本木は、外国人でにぎわう夜とアートのまちです。例えば、こうしたように、

夜は外国人でにぎわい、ここに行くとアートの文化、最新の日本のアートがここで見られる、そうしたまちにできたらと思いました。

お台場です。まだ行きます。お台場はバブル以降、下火となったまま、少し開発も途絶え、忘れ去られそうな地域。そこで、開発することをもう諦め、それよりも先に、もっと先の未来をとるので、オートメーションシティをつくっていきましょう。そうしたマルチメディア、ソーシャルメディアの企業が集まり、クリエイティブな、多言語が使えるデジタルビジネス街となります。全ては自動運転、空ではドローンが飛び交い、そのうち人も飛べるんじゃないかと思っています。それ以外の余った土地を大自然に還元し、奥の方ではお台場のサファリパークが出来上がってくる、そんなお台場が出来たらと思っています。

二子玉川。最近、新しいライフスタイルで注目される地域です。よりコンパクトで、便利で快適な生活を目指し、二子玉川には高層マンションが林立していきます。また、使われていなかった水の大切な水源を使い、より積極的な水の広場、公園が出来ることによって、子供たちが安全に水と触れる環境が出来上がってきます。

杉並区。もともと環境意識の高い杉並区は、大量の針葉樹が集まっていることを危惧し、ある地域と提携することによって杉の町並みへと生まれ変わります。また、池や川など水に恵まれた地域を生かし、冷暖房に頼らない循環型の冷水や温水を使ったまちが出来上がってきます。

次、だんだん西に行きますが、都道が横切る西東京市。インターネットの発達によって、街道沿いにあった流通センターやロードサイドショップが激減します。そこで、「東京ファーマーリング」によって、空地を利用した地域でのファーマーリングが出来上がってきます。また、都道なので、流通が便利だということで、西東京から都心部へ新鮮な野菜が直送できます。

そして最後に檜原村。檜原村は、こうした荒れた森を再生し、同時に、森を再生した中で五つ星の「東京リゾート」ということで、こうした村をつくり、同時に、村人とともに古い生活や伝統を引き継げるようなまち、そうしたことができないかと思いました。

そうした東京は未来のジャングルになれる、そんなことができないかということを考えました。夢物語なのかもしれませんが、夢を実現させるためにはビジョンが必要です。豊かな環境をつくるために、環境を理解し、傲慢ではなく謙虚に、地域のアイデアが東京の未来、新しいビジョンをつくれたらと思っています。東京はまだまだ可能性に満ちたまちだと思っています。以上です。

【小池知事】 田根さん、ありがとうございます。ビジュアルで非常にイメージが湧

くプレゼンテーション、誠にありがとうございました。シャツもカラフルで、ありがとうございました。

さあ、それでは、メディアアーティストの落合陽一さんに、次、お願いいたしましょう。是非とも突拍子もないような、いや、でも、100年後、「落合さんが、あれ、言っていたよね」と言って、誰が確認するかは別にして……。

【落合陽一様】 小池さん、生きていそうですね。

【小池知事】 え、そうですか。あ、そう、そう、そう。今、もうなかなか死ねない時代になりましたからね。

じゃ、お願いします。

【落合陽一様】 はい、よろしくお願いします。タイトルは「コンピューテーションによる近代の超克 テクノフォビア的な国政からテクノドリブンな地方自治へ」というテーマで、アジェンダですけど、最初に1分ぐらい自己紹介をさらっとさせていただきます。僕、研究者で、経営者で、芸術家で、大学教員なんですけれど、そして子育て世代の20代なので、その話をしようかなと思っています。

提言は4つあって、「少子・高齢化に際してどうやってテクノロジーを使っていくか」ということ、「個人の時代を目指す上で共有化の拡充というのは不可欠だけど、どうしたらいいんだろう」ということ、「テクノロジーに起因した社会運営を行っていく上で、どうやって地方自治というものを考えるべきか」ということと、最後に、「日本的文化感覚という中にテクノロジーってどう関わってくるんだろう」ということです。

僕がライフテーマにしているのは、どうやったらコンピューテーションによって人間的近現代が超克できるかということです。我々「人間」という定義は近代に発明したもので、例えばアートは、人間の定義とか人間性というものの裏返しにもあるし、リサーチもビジネスも1700年以降あらかじめ定義されたものなので、ここ300年の歴史しかないです。つまり、それをまず自覚的に、どうやってコンピューターが入ると変わるかということを考えています。

色々肩書があるんですけど、大きく塗り分けると、アートとリサーチとビジネスというのをやっている人間で、たくさんのメディアによく出ているように見えるんですが、デザイン誌とか、例えば『Nature』って雑誌とか、あと建築の雑誌とか、色々な所に出てきます。

もともと博士からやっている専門は、「どうやったら我々の光とか音が空間に広がりを持

つか」とか、例えば、これ、空間にプラズマで直接絵を描く装置とかなんですけど、「どうやったら波動現象をコンピューターの制御を使って最適な位置に最適な形に出せるか」ということを考えるというのが専門です。つまり、我々は今、ディスプレイがないと絵とか光が見えないんですけど、空間に直接光と音を出力して形をつくるというのが専門です。

今のは空間に直接光を描くわけですけど、これは今年の研究で、例えば空間のある一点のみしか音がしないスピーカーをつくと、我々の右耳には右、左耳には左、もしくはここに中国の方がいれば中国語、もしくはこっちに英語が流れるみたいな、ある空間に対して直接音を出力するような、じゃあ波面の制御、音と光の制御というのはどうやってやっていくんだろうみたいなことが、計算機処理と最適化のアルゴリズムによってどうやってできるかみたいなことをやっています。

もともとメディアアートをしているので、今までの人類にできなかったような彫刻表現とか、実際、物が浮いていたりとか、空に飛んでいたりみたいな形を、どうやったらコンピューター制御された物理場でつくることができるのかということに非常に興味があります。なので、専門は、「ソフトがあって、ハードがあって、ソフトがある」と僕は思っているんですけど、この世界って、「何か仕組みがあって、ハードウェアがあって、体験がある」というときに、1個目のソフトウェアをどうやって人工知能を使って最適化するかというのが1つの専門で、それが物理現象やハードウェアに最適化されるときに、どういう形をとるべきかということを考える。最後に、それがユーザーの体験、「わぁ、エモい」と思ったりとか、「わぁ気持ちいい」と思ったりというところに落とすという、この3つをどう掛け合わせていくかというのが僕の基軸にある考え方です。

まず1個目の提言から入ろうと思うんですけど、少子・高齢化社会において、我々は国際競争力を回復して成長戦略を考えるには、テクノロジーを用いて、多様な個人の特徴や可能性にフィットし、自動化と省人化を目指した社会インフラを構築し、また、その市場経済を構築しなければならないと。そのためには近代的な物の見方から脱却し、画一的なものを機械知能に置き換え、我々自身の思考基盤を更新する必要があります。

僕らは、そのことを計算機自然、デジタルネイチャーもしくは計算機的多様性、コンピューテーショナル・ダイバーシティと呼んでいます。どういう意味かと言うと、例えば僕らの研究室に行くと、金魚が空中に飛んでいると。その横に生の金魚がいるんですけど、これ、飛んでいる方の金魚を触っても触覚はないけど、生の金魚もふだん触らないですよ。水使うので、使ったりしないですよ。なので、「触らないものって、別にあってもな

くても、見ていりゃ良くね？」みたいなことを考えますと、我々の何が確からしくて、何が確からしくないのかというのは、デジタルデータが入ってくると変わってきますと。

そんなふうなときを考えると、じゃあ、人間がどこまで省人化できるのかというのをまず考えましょうと。ハードウェアで必要な省人化、どうやったら、例えば高齢化社会で老人を支えるために、もしくは、今、社会的弱者と呼ばれている人たちが社会的弱者でなくなるためには、どのようなハードウェア、例えばMRゴーグルを付けるとか、例えばロボットアームによって介護が可能になるとか、自動運転をどうやって制御するか、もしくは我々の身体をどうやって自分でコントロールすることができるようになるのかというのが、すごいキーワードになってきます。

例えば、これは我々の研究室でよくやっているやつですけど、右手三拍子、左手四拍子って、みんなたたけます？ ドラマーならたたけると思うけど。だけど、例えばこれ、腕に機械学習させた電気パッドで電氣流してやったら、動くわけですよ。これ、でも、面白いのは、この電気パッドを外しても、この人はたたける。外すとたたけるんですよ。つまり、筋肉から動かして脳みそを学習させるというのは大いにありなアプローチであります。つまり、人間が今とっているアプローチのうち、我々が頭で認識するまでにとるアプローチが弱過ぎると言うか、体から動かしてやるのが正しいアプローチです。

もしくは、例えば我々のラボだと、自動運転の車椅子とかつくっていたりするんですけど、じゃあ、自動運転の車椅子って人をはねちゃうと不安だから、途中で例えば看護師さんがここにバーチャルリアルティ的に入ったりして、人が行き交うようなところでどうやってそれに対応するかみたいな問題、つまり、人間と機械がどうやって協調操作して対象の自動車を制御するのかみたいなことをしっかり考えていかないといけないというフェーズに僕らは入っていると思います。

つまり、我々が今まで帰属していた人間社会というのは、何が標準かを決めて、そこからあぶれた人をどうやって対応するかって考えてきたんですけど、それをどうやってテクノロジーで補っていくかというのが最も重要な課題であると。つまり、男女の問題、人と機械の問題、健常者と決めたから障害者が生まれるということです。つまり、そういうようなどちらかがスタンダードだというような問題をテクノロジーを使って埋めていくことが必要です。そうなってくると、マス生産の論理で考える、つまり上の論理で考えると、同じものを標準的なものをひたすらつくって、標準的なものを使えない人は標準的なものを使わないわけです。そうじゃなくて、一つ一つ個別なものを最適化する問題を考

えましようと。

そうするとき、人間が幾らいても足りねえよ、労働が幾らあっても足りねえよって問題になるので、それはソフトウェアを使ってどうやって自動化するかということを考えるということを行います。例えばこれは、3Dプリンターで「アクチュエーター」ってモーターとか、動くものを自動でつくる我々の研究なんですけど、つまり、人間が設計しなくても、形と動きさえ入れれば自動で動くフィギュア、例えばウサギの耳がこうなるようなのって、機械的につくるの難しいんですけど、これはソフトウェアでCGを変形させたらフィジカルなものが直接3Dプリンターから出てきて、ひも通せば動くみたいな、そうすれば人間が設計することは全くないわけです。

あと、例えば、これ、来月、オーストラリアで発表するんですけど、例えば僕の大好きなブランドがあって、このブランドの画像をひたすら集めて、人工知能にブランドをつくらせますと。これは僕は見たことのない僕の着ているブランドの新作なんですけど、つまり本人がつくる。でも、これ、この低解像度のデータをネットで募集した安い人件費の人に型紙を書いてもらって、それをベースに服を起こすと、まさか偽物が一杯つくれるんですよね。多分、見分けつかないと思いますよね。

そういうようなことを考えるときに、じゃあ今、一番工数がかかってきたデザイナーのブロックをどうやったら機械学習でつくれるのか、もしくは、本人がもしかして死んじゃった後も、そのブランドはそれをつくり続けることができるかもしれない。それは複数の目で物が考えられるわけです。そうなったときに、人間が物つくってないんだから、コストめっちゃ低いんですよね。そういうような、どうやったら機械と人間が知的な意味でもお互いにやっていくかってアプローチはすごく重要です。

つまり、多様性ある未来の東京を考えるときに、自動化と省人化に対応する規制と規制緩和、あと機械知能と財産権に関する規制と規制緩和、あと、そういうような人機融合技術のためのブロックチェーンによるICOや市場経済の構築及び税制優遇、そして障害と国籍、男女に対するヘイトスピーチなど不当な差別に対する罰則の強化なんていうものが、我々の社会においてはすごく重要なファクターになっていると思います。

この調子で3つぐらいあるんですけど、あとの3つはわりと少ないんですが、個人の時代を目指す上で教育は重要ですと。教育で今一番問題なのは、大学が独立採算になってなくて、かつ画一的な受験があることだと僕は思っています。

その上で、例えばうちのラボとかですと、43人ぐらいいますと。国立大学ですが、研究

費の半分以上は一般企業からのお金で補っています。あと、僕、自分で知財を活用する企業を経営しているので、うちのラボの知財権を使ってどうやったらそれは社会実装できるかということをはたすらやっています。例えば東京大学って特許2,500個持っているんですけど、その2,500の特許で売り上げが上がるのって5億なんです。超少ないですよ。だから、そんな会社としては回らないんですけど、でも、それってビジネス化すればめちゃくちゃ回ると。例えば筑波大だったら、サイバーダインが上場した時に会社の市場価値が3,000億円になったわけですね。それが10%でも筑波大学が持っていたら300億円の売り上げになったはずで、5億にしたら60年分です。戦後、今まで全部の知財権を足してもその方が大きい、1社でね。そういうようなことをどうやってつくっていきけるかというのが1つキーワードになっていけると思います。

あともう一つが、受験に表されるような画一的指導、どうやったら全員が標準的な学力が持てるか、もしくはある一定の基準を持てるかというような指導プロセスというのは、例えば機械がやると、同じようなものは機械でも同じものがつくれるわけですよ。そうじゃなくて、どうやってそこを多様にしていくかという教育スタイルの方が重要であって、そこを今、あえて箱の中に入れていくようなアプローチをとっているということはどうにかしてやめていかないといけない。つまり、そういったような東京一極集中型の大学運営というのは実はそれに反していて、東京に大学をはたすら持ってくるのっておかしい。もう一つは、知財の活用ができない大学というのはなくなっていいんです。その2つをしっかりやっていくというのがもう一つのキーワードになっていると思います。

じゃあ、具体的に社会の形ってどんなふうなのと言うと、僕がよく言うのは、江戸時代とかインドのことを思い出してみてください。ここ、めちゃくちゃGDP低そうですよね。これって、多様性めっちゃ高いけど、車が人間をはねそうじゃないですか。でも、これ、もし自動運転だったら、人間をよけられると思います。つまり、どうやったら機械の方があふれる人間より賢いかの方がはるかに重要な問題であると。

そういったときに、こういうような多様性を維持するためには統一法では何とかならないので、じゃあ、どうやって地方分権にしていくかというのが一つキーワードになる。つまり、ベーシックインカム・オア・ベンチャーキャピタル。つまり、やる気ある人をやる気あるだけ伸ばす社会と、全員に標準的にお金を与える社会というのを考えていかないといけないけど、東京ってどっちなのと言ったら、僕は何となくレース型でベンチャーキャピタルな所かなと思っています。ただ、そここのところをどうやったら、今、支えてあげら

れるのか、もしくは伸ばしてあげられるのか、もしくは東京を真っ二つに割ってそういうことを考えるのかというのが、今のフェーズです。つまり、そういうような地域の変化速度を優遇するとか、人工知能の活用によってインフラを強化するみたいなことが一つ重要になってくるわけです。

最後、ちょっと伸びちゃったので、美的感覚の話だけばばとして終わろうと思うんですけど、我々の今使っている言葉というのが近代語であることを全員忘れてるんです。つまり、明治時代に福沢諭吉とかが頑張ってた言葉なので、僕らは日本語をしゃべっているだけで近代パラダイムの中で生きているわけです。つまり、1800年代後半に僕らは言葉を再発明したんです。つまり、これを考えないといけない。だから、明治は今の日本人の始まりなんです。しかも、僕らは明治のことを忘れちゃったから、多分昔のことを思い出せないんです。でも、それを何とかしてしゃべろうとして、例えば現代日本語で正しい概念を言うと片仮名語が増えるので、何かむちゃくちゃ片仮名で、「こいつ、うさん臭いやつだな」と思われると。これは全くおかしいので、逆に言うと、我々、例えば英語のユニバースと日本語の宇宙って全然違いますよね。宇は空間、宙は時間、ユニは統一的で、バースは物語という意味だったりとか、全く違う次元領域を日本語に翻訳しようとして、でも、できないから片仮名使っているような例に対して、ちゃんと教育しないとイケないですよ。こういうような教育プロセスの中で僕らに変な日本語しゃべっているところをまず考えないとイケない。

あと、我々がわびさびとかクールジャパンだと思っているようなものって、我々の美的感覚って、ざっと挙げただけでも、そうだな、10回、20回ぐらい余裕で2000年の中で変わっているわけですから、僕らがネオジャパンとか昭和とか江戸ぐらいのものを引っ張り出して「これが日本だ」って言っても、これ、日本じゃないですね。だって、縄文時代、弥生時代、大和朝廷、全然違うと。つまり、近代マッシュョ主義と昭和と世阿弥以降の美学で着色した世界で語彙を表明するのと言ったら、これはちゃんちゃらおかしいわけです。

でも、ここの中で一貫して、テクニウムがあると僕は思っているんですよ。例えば山紫水明とか、あと幽玄とか、解像度が2つ異なるものがありますと。僕、よく作品をつくるときに、「ここに雲がない。嫌なんだ」とか言うんですけど、「この雲のぼやけた感じがあそこの太陽とか金属をパキッと感じないと嫌なんだ」と言ってギリシャ人に力説すると、「いや、雲なんてない方がいいですよ」ってギリシャ人に言われると。「エーゲ海、晴れた方がいいに決まっているじゃないですか」みたいな。つまり、我々が持っている多様性の

ものをどうやって痛感させるかと言ったら、そこにある種、テクノロジーとかテクニウムというような、我々がからくりとか技法とか技って呼んできたものは、その見た目のモチーフに現れるものとは全然違う。つまり、モチーフに引っ張られると、それは江戸なのか、平安なのかみたいな話になっちゃうけど、モチーフじゃないものを追い求めていかないといけないと思います。

最後にまとめますが、要は、マスの時代というのは、我々、実際と切り離されたり、音と光を信じる訓練をしてきたわけです。1902年、例えば宇宙に行く映画ってあって、その60年後ぐらいに実際にNASAが月に行ったと言うけど、実際そこに誰かがいたわけでもないですよ。映像でしか知らないですよ。テレビの向こうの国会がそこにあるか分からないですよ。昨日やっていたかもしれないじゃないですか。そういうようなことを本気で信じる訓練をしてきて、みんなで同じ光と同じ音で教育されてきた世界というのは、めちゃくちゃぎまんであると。

これに対して、どうしたら我々は違う光と違う音もしくは個人の多様性に基づいた世界構築というのをしていけるかというのが、最終的なキーワードだと思います。つまり、東京は近代を脱して新たな多重的国家と地方分権の見本となるために、どうしたら経済を多層化して、近代的人間らしさに踊らされない、人間個性排除をやめないといけないと。で、多重化する経済のための基盤整備と規範の開放、多様性の創造をやっていくべきです。それにはこの4つの観点ぐらいは必要かなと思っています。

ありがとうございました。

**【小池知事】** ありがとうございました。もう多岐にわたる分析、そしてご提言でございました。

さあ、それでは、今日は本当にプレゼンターの皆さんも多種多様で、まさしくダイバーシティを体現しているかのように思ったわけではありますが、それぞれ皆さんのリアクション、質問等々、ご自由に、まず手を挙げてお願いします。どうでしょうか。伊勢谷さんからいきますか。

**【伊勢谷友介様】** 皆さん、ご苦労さまでした。3名の方、最初、何だったかと思いませんよね。宿輪さん、ご苦労さまでした。何かちょっと前までは、僕自身も2つの仕事を始めた時に、「二足のわらじ」ってある先輩たちにやゆされたんですよ。で、ふざけんなど思っていたんですね。何でかと言うと、やっぱり1つのことができる要領を持っている人って、2つ目のこともできる要領を持っていたりするとか思っていて、その人たちが、も

しかし先人が言うように1個のことをディープにやらない分、もしかしたら浅いのかもかもしれないけど、浅い分、ほかのことを知っていることによって、ほかのものをつなげて応用を利かせるというふうな役目が僕はあると思っていて、実は今、過去から今に比べると、僕が若い時と比べても、本当に個人が様々な方法でアプローチをしていくということというのはもう当然の時代になってきているというのはすごく感じます。だから、そのときに、セカンドキャリアと言うか、2つのものをちゃんとつなげる知識を広く持てるという人たちの社会的役割って本当に大きいんだろうなというふうに僕も想像していて、共感させていただきました。

あと、たくさん時間もないと思うので、とりあえず、落合さんには、実は先日、僕のラジオ番組に出ていただいて……。

**【落合陽一様】** ずっとイルカの話していましたよね。

**【伊勢谷友介様】** イルカの話していましたね。なぜイルカがいいのかって、ちょっとその話をし出すとどこに行くか分からないんですけど、特に僕がその時話したことで記憶に残っているのが、僕の言葉だった。僕は、今（落合さんが）おっしゃったことを、集権化が分権にどんどん行っているんじゃないですかというふうに言わせてもらったんですね。人類のことをすごく遠くから見ると、昔はやっぱり偉い人が集権的に何かをつくって、何かルールをつくる、何か常識をつくる、食料も責任をその人が持ちますして、どんどんどんどん集権、エネルギーもそれでやってきたんですけど、今、見回してみても、例えばブロックチェーンとかビットコインが、それこそ公共貨幣になろうとしている。つまり、誰かがつくるお金じゃなくて、それぞれで認め合う、認証し合うことによってそれぞれの価値をつくっていくようなことというのがどんどんどんどん生まれている。エネルギーに至ってもそうですし、個人の主権というものでしょうか、政治に関わる場所も昔と比べたら随分大きくなってきて、今、ますますそれも膨れていこうと。

この観点からすると、僕、すごく客観視すると、冷静に、政治家の人たちがいつこれをやってくれるんだろうなというのを僕はただただ期待して見ているんですよ、どちらかと言うと。落合さんも何かすごくそんなことを言っていらっしゃるんじゃないのかなって、勝手に僕、ちょっと……。

**【落合陽一様】** 100%正解です。

**【伊勢谷友介様】** はい。どうしてもやっぱり社会を、みんながそれぞれ、自分たちが未来に対して責任を持つ、自由が持てる、そのことによって個人個人が成長して新しい未

来の最適化をつくる。我々が今まで思っていたように過去が絶対正しいわけでもないですし、未来のために一番いい形を過去の失敗から学んで、今、新しいものをつくっていきつつ、この過程というのを僕らはやっていくべきで、そのお話の中にどこか集権から分権になっていく、この時代をどうやって、僕ら一般人も関われるようになりましたが、つくっていける話になってきたんじゃないかなと。長くなりましたが、そう思っております。

ありがとうございます。

**【落合陽一様】**　そこなんですけど、「個人から共依存」というのが、僕、キーワードだと思っていて、近代以降の社会というのは依存的ではあってはならないというパラダイムでできていて、しかし、依存的であっても、江戸時代は良かったはずなんです。隣が助け合って生きていたからです。つまり、個人という言葉をつくった瞬間から、我々は依存を切り離さざるを得なかったんですけど、でも、天才は依存なしでは生きられないし、もしくは才能は依存なしでは生きられないわけですよ。つまり、お互いに支え合っているから個々が研がれるわけなので、そういうものを脱しないと我々はそのジレンマから抜け出せない。つまり、失敗に厳しい社会というのは一人一人に個人という責任をとらせる社会なので、その裏返しが何かすごく出ている気がするんです、さっきの自由じゃないとかいうところに。というのをちょっと補足です。

**【小池知事】**　ありがとうございます。で、イルカはどうしたんですか。イルカは何、言語の話？

**【落合陽一様】**　イルカは三次元空間を音でスキャンして見ている、で、友達に音で伝えていて、お互いに名前があるので、生まれながらにスマホを持っているのと同じなんです。ということは、生まれながらにスマホを持っているやつが500万年とか海にいたら、それって、進化して俺たちの行く末を見ているんじゃないかという感じがすると。つまり、我々が安定した世界で、しかも何か外敵とかなかったら、実際、しかもイメージを直接送れたら、建築物とかきつと建てないですよ。とか、服とかつくらないと思うんですよ。つまり、どういう意味かと言うと、イメージが直接相手に送れるので、「それ、何かフィジカルなもの、つくる意味ないんじゃない？」みたいな話をしたりとか、そういうようなサイバーな話をしていました。

**【高橋みなみ様】**　面白い。

**【小池知事】**　分かった？

**【高橋みなみ様】**　はい、分かりました。

【小池知事】 さあ、宿輪さん、iPS細胞の話などありましたよね。この間、ベストセラーで『ライフ・シフト』という本があって、そこでは、カナダの人が、2007年に日本で生まれた人の50%は107歳まで生きるといふ、そういう本がありますね。だから、どんどん長寿化しているということは非常に喜ばしいことである一方で、色々社会保障なども考えなくちゃいけないという話です。どうでしょうか、これから長生きするのはとてもいいことでもあるけれども、今日は宿輪さんが医工連携という話をされました。そんなことでご質問等ありますでしょうか。いかがですか。じゃ、高校生。高校生内閣、今日は総理ですね。お願いします。

【浜田愛音様】 宿輪さんにお聞きしたいことと言うか、ちょっと質問があつて、先ほどお話の中で、例えば中学校での生活体験プログラムの的なのをやったらいいんじゃないかというのを提言していたと思うんですけど、その中でやっぱり、と言うか、まず技術を使うという話をしていたと思うんですけど、私たち、どんな技術がこの世の中に存在しているかということが多分理解していないと言うか、どういう技術があるかということ为例えば知れるプログラムだったりとか、そういうのがあったらいいんじゃないかなって思ったんです。例え、私とかも医療についてすごく興味があつて、今後すごく発展していくと思うんですけど、でも、そういうのって自分たちで実際つくってみたいとか、今後、未来に向けてどういうプログラム、どうやって医療に関われるのかとか、とても興味があるんですけど、どのように関わっていったらいいのかというところがすごく疑問で。

【伊勢谷友介様】 無理だよ、選ぶのね、学生の時点で。ここに未来があるからどうのとかいうのとかね。

【浜田愛音様】 はい、分からないところを……。

【伊勢谷友介様】 無理だよ。俺も分かんないし、多分分かってないじゃん。

【浜田愛音様】 模索しているところなんですけど。

【宿輪理紗様】 そうですね。医療って、ただ、皆さん1回は病院に行ったことあると思うので、例えば注射とか点滴とか受けたときに、ちょっとそこで、あ、これ、何が入っているんだろうとか考えるだけで、医療へ一歩、足を踏み入れたことになると思うんですね。そうやって、医療って遠いものだから、技術って良く分からないって思われがちなんですけど、私たちの身の近くに絶対にあるはずなんです。そこからもう一歩考えるか、考えないか、そこが技術を——技術とかも調べれば、今の時代、出てくる時代なので、それを調べるか、調べないか、それを行動に起こすか、起こさないかというところで、好

好奇心旺盛な人に育ってほしいというふうに思っています。

先ほど提案したプログラムも、その好奇心の幅を広げてほしいという意味も含まれていて、自分の世界だけにとどまっていると、ほかのことって知れないじゃないですか。そういうところで無理やり1年間とか地方に行かせる。もちろん海外でもいいんですけど、そういう所に行かせることによって、こんな世界があったんだという刺激を受けて、そこから何か自分で行動に移すという、そういうところにつなげていくと意外と技術って遠くないんじゃないかなというふうに感じています。大丈夫ですか。

【浜田愛音様】      ありがとうございます。

【小池知事】      さあ、久しぶりに蛭川さん、ご出席ありがとうございます。

【蛭川実花様】      すみません。

【小池知事】      何か今度、舞台じゃなくて、何ですか。

【蛭川実花様】      前回ですか。

【小池知事】      いやいや、展覧会が。

【蛭川実花様】      あ、はい、展覧会があるのと、あと、六本木ヒルズで大きなアートナイトというイベントがあるんですけど、そこのステージを全部やるのと、あと上海で大きな個展を今度やるので、それでちょっとバタバタしてしまっていて、すみませんでした。

今回、ものすごく面白くて、なるほどなど、何か講義を聞いているような、とても興味があることがたくさんあって、すごく私も聞き入ってしまったんですけども、田根君のは、本当にこうなったらいいのになという、むしろ子供が考えるようなぐらい、本当に多分みんながこうなったら面白いのになって思う第一歩なものをすごく分かりやすいビジュアルで出してくれているなと思って、でも、最近、思うのは、やっぱり提案しないと何も始まらないなということなんですね。こんなふうになったらいいよなって思うけど、それをこれだけのちゃんとした説得力がある形で出してくれているというのは、何か心強いと言いか、まずやっぱり色々なことをやるときに、夢のようだけど、本当にこうなったらいいよねということをしちんと大人である私たちが発言できる場にしていくということの大切さをすごく思いました。こうなったらいいのに、でも、どうしてできないんだろうということ話し合うきっかけになるでしょうし、本当にこうだったら、こんな東京だったら本当に自慢できるし、楽しいのになあと改めて見て思いました。で、ちょっと私が考えていたこととも近いので、また私も発表する機会があったらしたいなと思っています。

で、落合君のは、録画しないとついていけない情報量で。

【落合陽一様】 3回聞くって人がいますね、よく。

【蜷川実花様】 いや、ちょっとね、本当に私、これ、何か漏れたことが一杯あるんじゃないかと思いつつも、すごく希望にある種満ちていると言うか、技術とうまく付き合っているってこういうことなんだろうなって思ったり、マイナスなところに割と目を向けてしまうけれど、そうやっていけばこんなことができるんだとか、できないことができるようになるって本当にまさしく魔法だなと思っているんですけども、そういったことを分かりやすく、面白おかしく、きちんと説明して下さる存在というのはすごく重要で、本当に聞いていて楽しかったし、わくわくしました。本当、個人的に色々、今度もうちよつと詳しく教えてください。

【落合陽一様】 もちろん、はい。

【蜷川実花様】 子育てについても、じゃあどうやっていったらいいんだろうというのは、結構、本当に、私、こんなアーティストのようなことをしていますけれど、実際に子供に教えるときにすごく画一的なこと、「じゃ、学校の漢字テストちゃんとやりなさい」とかって教えている自分に、いつもすごく矛盾を感じるので、そこの垣根と言うか、自分が箱のスクエアの中に入っちゃっているというところをまず壊すことからかなと、落合さんの話を聞きながら思いました。

でも、本当、この技術の話は知らない話ばかりだったので、まるでジャンルが違いますが、こういった機会に色々なことを知れるのは本当にいいなと思ったし、自分でもきちんと調べてみようと思いました。ありがとうございます。

【小池知事】 ありがとうございます。そういえば、田根さんが具体的にビジュアルで色々示してくださって、六本木、面白いじゃないですか、これ。ねえ。

【蜷川実花様】 それ、私の写真なんです。

【小池知事】 あ、そうなんだ。

【田根剛様】 まちが蜷川展になったら、もう美術館だけで展覧会をするだけじゃなくて、まちにあふれたらいいとか。

【蜷川実花様】 昨日連絡が来て、「これを資料に使っていいですか」という。「全然大丈夫。使って」と。

【田根剛様】 許しが出たので、慌ててお願いをした。

【小池知事】 これは、プロジェクション・マッピングになっているんですか。

【田根剛様】 それはですね、例えば展覧会があったときに、六本木の高速道路の下と

いう暗くて使われない所に、シートを張ったりとか、看板も夜になるとアートに変わるとか、そんなことができたなら、まちが、やっぱりそこに行くと、今、ここで何が起きているかというのが見えたらいいなという感じです。

【小池知事】 お台場の海浜公園は、これは？

【田根剛様】 これはですね、大きな土地、人工地盤が開発されたまま空地が一杯目立つので、だったら、そこをもう開発する資金を諦めて、もっとデジタルな社会で自動化をしていこうというアイデアですね。

【小池知事】 これ、ドローンが飛んでいるの？

【田根剛様】 ドローンや、そのうち人が飛んだらいいんじゃないかと。

【小池知事】 人が飛んでる、ああ。

【田根剛様】 最初は本当に色々考えて、今回、未来ビジョンに呼んでいただいて、難しいなど。結構暗くしたらいいんじゃないかな、東京を明るくせずにとか、色々考えていたんですけども、最初に高校生内閣の皆さんがプレゼンをしてくださって、それを見て、そうだよな、やっぱり僕らがそんな今の現状を見てネガティブな気持ちになるんじゃないかと、頑張んなきゃいけないよなというので盛り上がり、それで思い切った提案をしたという。アイデアはやっぱり本当に色々な人が出すことによって、アイデアを出す力がないとポジティブな社会はつくれないので、文句言わずに、もっとアイデアを出し、そこによって未来をつくっていく社会があったらいいなという気持ちで出しました。

【小池知事】 はい。ほか、皆さん、ご質問とかご意見とかどンドン。はい、メイミさん。

【メイミ様】 3人の皆様、ありがとうございます。楽しく聞かせていただきました。

私は、宿輪さんのお話を聞きながらちょっと考えたことなんですけれども、価値観の違いを埋めていくというようなお話があったと思うんですが、技術者とお医者さんとの価値観の違いという話がありましたね。私たち一般の人たちの価値観のずれみたいなものもあるのかなということを感じました。技術がどんどん進化して、技術者がこういう目的とか意図を持ってつくったものに対して、一般の市民がちょっと違った見方をしてしまったりということもあったりするかなと思います。例えば出生前診断とかってありますけれども、そもそも、染色体の異常を調べて事前に分かることで対処がスムーズにいくようにというような目的で技術開発されたものだと聞いたんですけれども、実際、私たちは、それによって産むか産まないかということ判断するというふうに、間違っただけか、そう

いう見方をする方もいたりというところはずれが生じていたり、というのも、今、現状としてあるなと思ひまして、なので、そこら辺の技術の進歩に対して、ずれを、いかに価値観を統一させていくのをどうしていったらいいのかなということを思ひました。そこもできると全体的に丸く収まると言ひますか、スムーズに行くのかなと思ひました。以上です。

**【宿輪理紗様】** 先ほど価値観というふうにおっしゃっていただいたんですが、私、ちょっと倫理観も変わってきているなと思ひまして、多分、今の人の命って、生まれてきてから育てると言うのが当たり前だったんですけど、中絶ができるようになりました。そして、出生前診断ができるようになりました。それによって、命の重さについてもう一度考え直さなきゃいけないなというのはかなり感じています。私、細胞シートを使って心臓をつくれるというふうに言ったんですが、もう今、肝臓がない豚をつくって、そこに人のiPS細胞を入れれば、人の肝臓が豚の中でつくれるようになってしまっている時代なんです。このように体外で心臓をつくるだけじゃなくて、豚から人の心臓、「豚の中でつくられた人の肝臓だったりを人に移植しちゃえば、それで良くない？」みたいな話も出てきちゃっていて、それを究極化させていくと、例えば私が心臓悪くなったとき用に私のクローンをつくっておけば、心臓をすぐに、「別に拒絶反応とかもないから、それがいいじゃん」というふうに、究極だと多分なってしまうと思うんです。そこも話し合ひで倫理観が決まるものなのか分からないんですけど、ちょっと皆さんで考えながらこういう医工連携を応援して、もっともっと皆さんがQOL（クオリティ・オブ・ライフ）を高めるとか長寿にするとか、そういう目的に使っていただければなというふうに思ひています。

**【落合陽一様】** 僕、逆に聞いてみたいんですけど、バイオエシックスって誰が得して考えているんですかね。エシックス、生命倫理学、今みたいな話。

**【宿輪理紗様】** 分からないです。

**【落合陽一様】** 1970年代、突如現れたでしょう、あれ。別に、分からないですけど、何かすごく意味ないなと思うんですけどね。だって、重要なところもめっちゃあるけど、それをしていることによって人が死んでいたりとかよくあるじゃないですか。何か本末転倒だし、トートロジーになっていること多いし、「おまえは豚肉の中に生まれた肝臓をやゆしながら豚肉食うのか」みたいな感じじゃないですか。あれは倫理的トートロジーが狂っていることがよくある。

**【宿輪理紗様】** 確かにそれ、数値化して示せるものじゃないので、私たちが分かりづらいつころだなというのは思ひます。倫理観とかいうところ。それで、数値化されてい

ないからこそルールも設定できないし、そのルールが決まっていたら、「それ、変えればいいじゃん」ってなるんですけど、そういう感情面で動いていることって、私たちが何となく雰囲気を変えていかないと変わっていかないと……。

【落合陽一様】 雰囲気じゃ変わらないでしょう。多分教育でしか変わらないし、感情の話じゃないんですよ、あれ、多分。やっぱり文化とか定義の話だと思うんですけど。それは、我々は別に西洋哲学に接続されているわけではないので、我々には我々の独自の倫理観があるはずで、かつ西洋には西洋の独自の倫理観があるはずだと俺は思っているんですけど、そういうところの安易なグローバリズムが何か我々の独自性を奪っていると思うんですよ。つまり、我々はフランス革命で人の首をはねてないし、近代化する時に、我々、血流してないんですよ。つまり、江戸時代から明治時代を迎える時に、果たして江戸城で殺りくしたかとか、徳川幕府並べて全員ギロチンではねたかと言ったら、そんなことはしてないわけですよ。つまり、我々が獲得すべき東洋的倫理観が果たして西洋的倫理観と等しいのかどうかという考え方自体はものすごく重要で、それを何か無批判に迎合して受け入れてきたのが戦後の歴史なので、それはあんまりね、僕、良くないんじゃないかなとちょっと思っています。

【小池知事】 はい、パクン。

【パクン（パトリック・ハーラン）様】 僕はここが一番面白いところかなと思うんですよ。今日の3つのプレゼン、非常に面白く見せていただきましたけど、共通点として、テクノロジーと我々の未来とはどういう関係で育っていくのかということを考える中で、色々な疑問も出てきたのが共通点だなと思いました。今の医工連携とありますけど、医だけではなく、色々ところで、工業とか技術の向上によって新しい疑問がどんどん出てくるんですね。倫理として、道徳として、人間社会として、我々、どう考えているのか、どういう方向を目指すべきなのか。例えば建築・都市計画だったら、誰のためのまちなのか。それは、もちろんお金持ちがまちをつくり直すことはできるけど、みんなそこで平等に暮らすことができるのか。ベーシックインカム v s 歴史的資産という、そういう経済体制のあるべき姿とかも考えるべきところですし、人間はどこまでできるのか。医療の最近の研究結果と言うと、例えば人間のDNAを切って遺伝子組み換えした後、受精させることができた、実際に子供を産ませることができるということまで来て、それは先月発表されたばかりなんですけど、どこまで自分の子供の特徴を選んでいいのか。

本当にこういう僕らがここで1時間だけ話し合っただけでも、もう永遠の課題が幾つか

見えてきているんですね。冒頭で、今日は最後の方で、これ、どうまとめていくのか、今回の未来ビジョン懇談会の結果をどう一つの形にするのかというテーマが出ましたけど、もしかしたら、次の議論につなげるのが正解かなと思うんですよ。この道德、倫理、社会的な観点・価値観をもう一回、日本人じゃないけど、日本の皆さんがゼロから考え直すきっかけが出来たらいいかもしれないなと思います。

【小池知事】 ありがとうございます。今日、いかがでしょうか。はい、きこりさん。

【青木亮輔様】 どうもありがとうございました。今日お聞きしていて思ったのが、これまでの技術というのは、やはり大量生産とかそういったものをするためにいかに規格化していったって効率的にやっていくかというのがこれまでの技術だったのかなと思ったんですけど、今日のお話を聞いていて思ったのが、これからの技術というのはいかに個性を生かしていくための技術なのかなと。ちょうど今日、ここに来る前に、都内に五十数年ぶりに私立の小学校が出来るということで、是非じゃあ東京の木を使ってもらおうと思ってちょっとプレゼンに行ったんですが、その時に話に出たのが、いかに規格化された材料が、どれだけの量、短納期で出来るかということを言われたんですね。でも、東京ってなかなかそういったことが難しく、じゃあ、いかにそういった個性を生かしていくかといったときに、規格化されたものを使うというのが、例えばこの田根さんの写真で色々出てくる建築物もわりと直線的なものが多くて、ああいう写真も建物もそうですけど、直線的なものってこれまでの技術で作り出されたもので、これからは、田根さんのこの檜原村の写真にあるような、こういうカーブのある、要は個性のある素材をいかに技術でそのまま使っていくかって、昔のたくみの人がやっていた技術というのをいかに自動化していくかということが、すごく今後の技術の、僕らの仕事で言うと生かしどころなのかなというふうに思っていて、是非そういったもので、もうたくみの人って今どんどんどんどん減ってしまっている中で、そういう個性を生かした建築が昔みたいに出来るようになると歩どまりも良くなって無駄が出ないというような、資源を生かし切るということもできるので、何かそういう技術が今後より発展していけば、それこそ本当、明るい東京の未来が描けるのかななんていうふうに思いました。ありがとうございました。

【伊勢谷友介様】 大量生産と大量消費のマッチングが合わなくなってきたということですね。

【青木亮輔様】 そうですね。やはり無理がすごく来ていて、それって色々なところでもう見え隠れしていますよね。

【伊勢谷友介様】 だからやっぱり、少ない消費と必要な人たちをちゃんとマッチングして、対応のある商品がつかれる状況にしくちゃいけないということですね。

【青木亮輔様】 そうですね、はい。本当、この檜原村の「東京リゾート」いいなと思って、ありがとうございます。こういったものがやはりもう少し更に自然の素材をそのまま生かせるような時が来たら、更にこの中に本当溶け込んで、「見えないんじゃないの？」みたいな、そういうことが更にイメージできました。ありがとうございました。

【小池知事】 ありがとうございます。

じゃあ、今度は海の方から行きますか。はい、西田さん。

【西田圭志様】 とても面白いプレゼン、ありがとうございました。前回の会でちらっと話したんですけど、何かAIの話が出てきたじゃないですか、前回。その時に僕が、AIが漁場を教えてくれて、ここに行けば魚が捕れるよって教えてくれたらいいなって話をしたら、伊勢谷さんに、終わった後に「海の魚、全部捕り尽くす気かよ」って言われたんですけど、漁業に限らず色々な仕事って、今、うまい人がたくさん稼いで、下手な人が全然稼がない、どの仕事でもそうだと思うんですよ。でも、そういううまい人と下手の差をAIとかで埋められるようになれば、結局みんなのレベルが同じになるから、競争でたくさん稼ごうというんじゃなくて、例えば漁業だったら、どうやれば一番稼ぐことができるかというのは、消費者がどうやれば一番満足するかという方向にシフトしていくと思うんですよ。だから、そういう技術が生まれると、もっと面白い社会になるんじゃないかなと。

【伊勢谷友介様】 みんなが均等、イーブンにね。

【西田圭志様】 そうですね。

【伊勢谷友介様】 で、自炊するんだ。

【西田圭志様】 捕り尽くすんじゃなくて、将来も含めて一番利益が出る形にみんな同じレベルになるから、みんなで協力してできるんじゃないかなと思います。

【伊勢谷友介様】 じゃ、捕れるだけ捕るのではなくて、バランスをとるためにちょっと捕らなかつたり。

【西田圭志様】 そうですね。今のあれだと、うまい人はたくさん捕りたいし、下手な人は捕れないから、競争になっちゃうんですけど。

【伊勢谷友介様】 逆に悪いと。

【西田圭志様】 うん。みんなが同じレベルになると、競争しても意味ないしという…

…。

【伊勢谷友介様】 理解できました。

【西田圭志様】 未来になるんじゃないかなと思います。

【伊勢谷友介様】 そのとおりだと思います。

【落合陽一様】 みんなを同じレベルにしても、競争は発生する。

【西田圭志様】 しますかね。

【落合陽一様】 する。だって、働いている時間を変えるか、投下する資本を変えればいいから、それは発生する。だから、要は、漁獲量を制限しないといけなくて、その場合は。それは実はテクノロジーの問題ではない。

【西田圭志様】 うーん。

【パッケン（パトリック・ハーラン）様】 それが利益を求める社会なのか、公益を求める社会なのかという。

【落合陽一様】 だからそこがポイントで、でも、今の発言、ちょっと面白かったのは、つまり、それを規格化して早く失敗するのはどちらかということなんですね。つまり、テストベッドで、ここは無限に捕っていい村と、こっちは無限に捕っちゃいけない村というのを、機械化以前のものですよ、これって。つまり、漁獲量の制限を設けなくて、ひたすら捕って、どっちが早く失敗するか、早く漁業制限がなくなるかというような議論って結構大切で、なぜなら、地方自治がなぜ大切かと言うと、それがテクノロジーをもし導入したらどうなるかというような議論は、テクノロジーを導入する前にもう分かっているんですよ。つまり、そのくびきをどこにつくるかを考えないといけなくて、つまり今の問題なんです、これって。テクノロジーが発展したらやがてそろそろ問題じゃなくて、テクノロジー入れる前からもはや分かり切った問題なので、それを今、東京都と神奈川県と愛知県でどう変えるかみたいな考え方なんだよね、多分必要なのは。今のご指摘は正しい、だから。

【西田圭志様】 ありがとうございます。

【小池知事】 いかがでしょうか。音楽の、はい、文化の観点から。

【菊地裕介様】 菊地です。今日のプレゼン、全部すごく興味深く聞かせていただいたんですけども、色々なジャンルによる島に分かれちゃっているというのは僕らの世界にもあって、音楽の世界で言うと、まず、演奏家と作曲家というのは近代を境にもものすごい乖離してしまっているということと、あと、演奏家と聴衆というのもすごく離れてしまっ

た。要するに、作曲する人、そして弾く人、それからそれを聞く人というのが、みんなだんだんばらばらになっていっちゃっているということが起きていて、その音楽というのは研究のためにしている音楽、作曲の世界はそっちの方向に突き進んでしまったんですね。そのことは今、自己批判が行われていて、また、聞く人のことを考えた音楽にしようとか、そういう流れはあるんですけども、そういうふうにとんどん分かれていってしまった。そのことによってやっぱり衰退と言うか、ちょっと発展が止まってしまっている。僕らのやっていることは本当に人のためになれているのかなと、すごくそれを考えることがあります。

音楽が人に与えている恩恵って色々あるはずだと思うんですけど、1つには、学ぶこと、学ぶというプロセスということによって受ける恩恵。論理的な思考を理解するとか、あとは、人によって全然違う演奏をする、その多様性というのはどこから来るかと、そういうことに思いをはせると、そういったことを理解する。これは学ぶということから得られる恩恵ですね。もう一つは、体験を共有できる。これは聞くということ。近代においては特に、それこそ先ほど落合さんがおっしゃっていたマス、マス生産みたいな感じで、大きなホールに多くの人が集まって、大きな音が出る楽器で、みんなで同じ演奏を聞くと。その共通の体験をするということも、これはすごく気分的に盛り上がることなんですけど、同時に、それによる制約というのも当然生じるわけで、何回か前の時に小池さんがおっしゃっていた、せきを我慢するのがとても大変だと、ライブの会場で。そういうことは当然あることで、だから、それは空間を共有しているから、当然、音声にしても、光にしても、相互に影響を与えているわけですよ。それを我慢するというのももちろん大変なことだし、それはしないで済む方法ももしかしたらあるのかもしれないし、というようなことを今考えていたんですけど、それに絡めると、ライブが絶対なのか、録音というものが、レコードとかCDというものが近代に出てきて、その方がミスがなくつくれるから、その方が上なのか、どっちがより上質な体験なのかみたいなこともすごく考えていることで、どっちでもないとももちろん思うんですけど、昔はレコードコンサートなんていうものもあったわけですね。レコードをみんなで集まって聞くんなんていうのもあったわけで。こういった過去から現在にかけて起きていたことを踏まえて、これから、例えば先ほど落合さんのおっしゃった指向性の強い音声デバイスというのがあるとか、特定の相手に対してのみ作用するとか、あるいは誰かが出しちゃった騒音を打ち消すような、そういう装置が出来るのかもしれないとか、何かそういうことを一杯結び付けられるようなものがあるのかな

って、今、すごく聞きながら思っています。結局、人の夢と言うか、僕の場合は音楽を、今、例に挙げていますが、どんなことを人と共有して体験して、また自分が実践していくかということ色々な形で、色々なジャンルの研究というのがこれから進んでいくといのかなって思ったんですけども。

で、最後に1つ、演奏するということと聞くということが乖離しているってさっき話したんですけど、僕、よく夢見るんですよ。僕、バイオリンなんて全然弾けないんですけども、夢の中でバイオリンのすごい名曲をものすごく達者に弾くことができています。これ、すばらしい経験なんですけど、もちろん、目が覚めればバイオリンなんか音一個出せないぐらいなんですけど、ただ、自分の中で、こういう音楽をバイオリンを使ってしたいみたいなものはあるわけで、これって今は夢なんですけど、もしかして、こういうことってかなうかもしれないなってすごく考えているんですね。まあそんなところです。

ありがとうございます。

【小池知事】 ありがとうございます。レコードという言葉が久しぶりに聞いたような気が……。

【菊地裕介様】 昭和の人間なので。

【小池知事】 昭和の人間、そうですか。いやいや、ありがとうございます。

【伊勢谷友介様】 何でレコードをみんなで聞いている時代があったんですか。

【菊地裕介様】 ありました、ありました。

【落合陽一様】 でも、今、DJはレコードライブですよ。

【伊勢谷友介様】 あ、そういうことになるのか。

【落合陽一様】 本質的には。

【伊勢谷友介様】 そうか。みんなで盛り上がったり。

【パッケン（パトリック・ハーラン）様】 珍しい時代ですね。

【伊勢谷友介様】 何か僕ら、こういう（ヘッドフォンの）イメージがすごい強くて、一番ベストなのはこれで聞くのがいい、一人が一番環境いいわけだから、そっちの方がいいって想像しちゃったんですけど、違うんですね。

【パッケン（パトリック・ハーラン）様】 この（ヘッドフォンの）時代ですよ。

【伊勢谷友介様】 そうです。オーケストラ聞きながら、少しずつみんなでこうなっていたんですね。はい、ありがとうございます。すごい時代だな。

【小池知事】 はい、みなみさん。

**【高橋みなみ様】** 皆さん、プレゼンテーションお疲れさまでした。すごく面白かったです。田根さんの島という考え方を全然したことなかったの、私、八王子市出身なんですけど、案外大きいんだなということをちょっとにやっとしていました。八王子の人って、森、すごく好きなんです。すごい自然とかが。でも、その一方で立川とすごく戦っている部分がありまして、どっちが都会なんだみたいな、どっちが都会になっていくんだみたいなのをずっと隣同士でいがみ合っていたりもするんですけども、都会になってほしい一方で自然は残してほしいみたいな、進化してほしいんだけど、残るところは残してほしいみたいながある中で、傲慢ではなく謙虚にアイデアを出し合いながら未来の形というのが出来ていくんだなというのを、田根さんの写真で見たらすごく楽しくなりましたね。もう銀座とかもそうですし、本当に六本木、渋谷もそうですし、もっともっと頭柔かく考えたいな。物の見方とか、脱却というのも落合さんから出ていましたけど、常識からの脱却と言うか、もっと皆さんみたいに柔かく考えたいなというのをすごく思いました。ありがとうございます。

**【落合陽一様】** すみません、僕、田根さんに1個だけ聞きたいんですけど、いいですか。島にするには海がないといけないと思うんですよ。これは意味は、境界がないと島が出来ない、もしくはミディアムがないと島が誕生しない。つまり、島と島の間には緩衝地帯があるか、もしくは強固な壁があるか、何かがないと多様性が維持できないと僕は思うんですけど、その場合、東京を11区ぐらいにして、12区ぐらい共同区にして、間みたいな。分からないですけど、どうやったら島化できますか。

**【田根剛様】** 島というのは一つの比喻で、まず環境をつくろうと思った場合、何かしら物理的なもので切らなきゃいけない。けど、物理的に切れてない場合は、制度とかルールとか決まり事とかというのを変えてしまった瞬間に、やっぱり情報が環境をつくったり、コードがモードに変わるみたいな話で考えると、落合さんのお話も同じで、今の統一的な、近代のシステムではこういうことは絶対できない。そういう意味では、地方分権もそうだし、地域をオリジナルな環境にするには、もうそういった何かで閉じてしまう、くくってしまうと、その独自の環境がそのまま生成されていくというのが、何か合っているんじゃないかなというイメージです。

**【落合陽一様】** はい、と思いました。要は、囲っておけばガラパゴスになるということですよ。

**【田根剛様】** そうですね。最初はガラパゴス計画でしたが、ちょっと違うなと思って、

真面目に東京「島」計画になりました。

【落合陽一様】 東京「島」計画。なるほど、なるほど。

【田根剛様】 そういう感じです。

【パクン（パトリック・ハーラン）様】 僕、田根さんのプレゼンの中で、自分が昔から本当に疑問に思っていることが一杯登場して、すごい共感が湧いたんですよ。日本に来て、何でこんなにビルが無造作に建て込まれているんだと。都市計画、昔からやってないのかと。例えば、日本の方は自分の外見も、車とか、ものすごく気にしているのに、30億円のすごいきれいなビルの前に3,000円のコーンを置いてぶっ壊すんですよ。何でだろうと。何で世界遺産の色々な文化遺産の前に電線がこんなにはびこっているだろうと、不思議に思うんですけど、本当にこういう長期的な計画、是非、都の方で色々挙げて、みんな議論して進めていただきたいですね。

【田根剛様】 それはよく外国人からも言われて、何でこんなに日本は自由に建築物が作れるんだと言うと、やっぱり土地が個人に属しているというのが大きな違いなんですよ。面ではなくて、個人が土地に、お金持ちが建てた瞬間に、隣の建物がぼろ家でもそれが成り立つというのが東京の風景だと。

【パクン（パトリック・ハーラン）様】 あと、ちょっと触れましたけど、もう減価償却の対象になっていまして、減っていくから、30年後には誰も買わない家になっているから、1つの代だけで全部使い切ろうと思って変な家を建てますよね。ちなみに、僕もすごく変な家を建てましたから、よく分かります。

【田根剛様】 そういう人が多いというのが日本の特徴ですね。

【小池知事】 ちなみに、先日発表したんですが、日本橋で、東京の一種の起点、そこから出発点になっている所が、1964年の東京オリンピックの際に首都高速を通さないといけないというので、そして、早くつくらなくちゃというので川の上につくった。その結果、日本橋の上にとかーんと首都高が走っていて、でも、みんなもう目が慣れちゃって、当たり前のように思っているけど、パリであんなことやったらアウトですよ。今度は、少し時間はかかりますけれども、これまで見えていたインフラというのをできるだけ見えなくする。電柱もそうですけれども、電線もそうですけれども。だから、これからは「こういうインフラつくりました」と見せるのではなくて、見せないインフラということが重要になってくるのかなというふうに思っています。

この六本木のも面白いし、渋谷の109の所が何か超未来的な、建築中のような、出来上が

っているような、よく分からないんですけれども、非常に目が覚めるような提言をいただいたわけであります。

それでは、そろそろ時間の関係もありますので、もう本当、多岐にわたるお話をいただいています。2050年の東京、どんな東京にしたいかということで、ずっと皆さん話し合っていたいただいて、それがハードだったり、今日は、i P S細胞もそうですけれども、倫理の話にまで膨らんできています。なかなかアウトプットと言っても難しいところがあると思うんですけれども、だんだん集約して、この会としてこういう東京にしたいという、そういうメッセージをまとめていきたい。つまり、アウトプットのことについて議論を展開したいと思います。

ちょっと事務局の方から考え方を。

【山下部長】 それでは、お手元に配付しております、右肩に資料1というふうに書いてあるペーパーをご覧ください。前の画面にもお出ししております。この資料1は、この懇談会が描く未来像（イメージ）について、一つの案として整理したものでございます。

資料の左上のコンセプトですけれども、これまでにない大胆な発想に基づいて、2050年頃の東京、日本の未来像の一端をアウトプットしていくということでどうか、というふうに整理をいたしました。

また、その右、未来像を描く意義ですけれども、未来像を描くことが都における計画の推進などに新たな発想を取り入れる。あるいは、都民一人一人が東京の未来を自分のこととして考えるきっかけにつながるのではないかと、いうふうに考えております。

それから、中ほどの3、未来像の位置づけでございますけれども、イメージ図を示しておりますが、現代のように時間の流れるスピードが早いときにおいては、2050年頃の東京というのも比較的遠い未来と言いますか、結構予測しにくいような未来なのかなというふうに思っておりますけれども、逆にこれを描いていきたいというふうに考えておりますとともに、段階的にどうなってほしいかという近い未来にも触れられればという感じでプロットをしております。発信方法などは、今後、こうした場で検討できればというふうに思っております。

続きまして、資料2、今後のスケジュールをご覧いただければというふうに思います。今後は、懇談会の場でメンバーの皆様によるプレゼンテーションに加えて、アウトプットについても議論を深めていきたいというふうに考えております。そして、年度末に当たる来年の3月を目途にアウトプットが出せればどうかなというふうに考えております。

なお、本日ご説明しました内容はあくまで案でございます、皆様からご意見を頂戴しまして検討を進めていければというふうに思っております。

説明は以上でございます。

**【小池知事】**　　ということで、このビジョン懇談会、それぞれプレゼンをずっと重ねてきております。そして、これからもまた、例えば海は西田さん、山は青木さん、それぞれご提言もいただきたい。それをどうやって伝えていくかについては、漫画家の山科さんにも参加していただいているので、場合によっては漫画化しちゃってもいいかもしれない。色々あると思います。とにかくまず、皆さんの夢、ビジョンをバツと出していただいて、それをだんだん集約させていく方向性を、みんなで共有をまずはしていきたいと思っております。

一番最初、覚えていらっしゃるでしょうか。遠い所の人と話ができると言って、無線機がなくなるといふ話をしましたよね。それから、遠い所の品物がすぐ手に入るようになるというような話もしました。今の通販の話になりますね。とかとか、昔、100年前の人たちがとんでもないことを言っているのが、今、とんでもないことが当たり前になるぐらいの時代になっている。だから、2050年の時点でどんな東京だったらいいかなというのを、まず発想を柔軟に——皆さんは発想柔軟なんですから、であるはずなので、是非その辺のところをこれからも出し続けていただきたいと思っております。それによって、2050年、こんなバラ色、いや、こんな暗い色、色々あると思いますけれども、それを皆さんのメッセージ、ビジョンにしていいただきたいと思っております。また次回、今度のプレゼンの方を決めて、そして皆さんと色々議論を交わしていきたいと思っております。

さっきも申し上げたように、ベストセラーで、2007年に生まれた日本人というのは、つまり10歳だ、今。その子たちは、医療の発達によって、そしてそれこそ医療技術の発展に伴って、なかなか死ねない。107歳まで生きちゃうと。先日、私の学校の同窓生でもありません日野原先生は、105歳まで元気で、お亡くなりになりましたね。あの日野原先生みたいな方が当たり前になるという時代、皆さん、あと何十年生きる？

**【伊勢谷友介様】**　　100までです。僕、今、40なので、あと60年ぐらい。

**【小池知事】**　　60年、うわ、長いね。どうする？

**【伊勢谷友介様】**　　何か聞いているんですけど、人間の付き合いもまたもう一種増えるというふうな。

**【小池知事】**　　そう、そう、そう。だから、これまでは、学ぶ、仕事する、あの世へ行

くみたいな。

【伊勢谷友介様】 早いな。

【小池知事】 ちょっと早いね。

【伊勢谷友介様】 早いですね。

【小池知事】 それが、学ぶから、仕事するから、また学ぶになったりとかね、ライフスタイルと言うか、ライフサイクルが変わりますよと。昔、明治維新の人たちってみんな30代、40代ですよ。時には思いのほか長く生きたりした明治維新の志士もいますけれども、でも、それを考えたら、私たちの人生設計っておのずと変わってくる。そういう中で、その器である東京はどうあるべきなのかということに対しての皆さんの考え、これから更に深めていきたいと思います。

ということで、今日は時間がもう参りました。今日は、宿輪さん、田根さん、そして落合さん、プレゼンテーションありがとうございました。そしてまた、次回はぶっ飛びのビジョンを皆さんからまたお聞かせいただければと、このように思っておりますので、ご用意の方、よろしく願いいたします。

どうも皆さん、ご協力ありがとうございました。

【岩瀬次長】 ありがとうございました。以上をもちまして、第5回東京未来ビジョン懇談会を終了いたします。

次回は、10月中旬頃の開催を予定してございます。本日は誠にありがとうございました。

— 了 —